

芦生からの便り 第9回



こんにちは！芦生研究林です。
 “モウ、モウ”と毎回、牛ではないのですが、“もう”7月ですね。（笑）
 早いものです。
 皆さん、お元気ですか？

これから、芦生研究林は、学生の実習や小学生や高校生の体験学習等で、一番賑やかな時期を迎えます。

春秋の大人が多い時期とは、ちょっと様子が変わります。
 何と言っても、相手はパワーにあふれている世代ですからね。
 うちの若い職員も、タジタジです。

小学生にすれば、立派な「おじさん」ですから…。
 そんな子供とうちの職員のやり取りの光景を見ていると、ほのぼのしていて良いなあ、と思う反面、これで良いのかな、という疑問もわいてくるのです。

芦生研究林は、最初の芦生便りにも書きましたように、研究林として成り立っています。けれども、研究や学生の実習等に支障のない程度に、一般の方の見学や実習も受け入れています。

…それは、開かれた大学としての責務でありましょう。
 それに何の異論があるはずありません。
 が、その中に、ハンディをお持ちの方が、いらっしゃらないのはどうしてでしょう？
 芦生の自然が癒してくれる、と人は集まります。
 その「癒し」というものを一番必要としている人々に、一番遠い存在であるのが、今の芦生研究林です。

確かに、そうした人を受け入れるのには、一般の方の場合よりも細心の注意が必要です。
 数多くの???をクリアしなくてはなりません。
 その?を数えていけば、受け入れられない方がいい、と言う意見に落ち着いていきますね。
 でも、果たしてそれでいいのでしょうか？

「由良川の源流に近いから、演習林は合併浄化槽にしなければいけないのに、しないのは何で？」

とは、新婚時代に芦生に住みだして、家内が真っ先に私に対して言った言葉です。
 当時の私は、返答に窮したのを今でも覚えています。
 それから10ヶ月後に私は、京大から宮崎大に移ったわけですが、その後、長い年月を経て、芦生研究林は、やっと昨年、合併浄化槽が実現したのです。
 家内のような素人が口にしてから、その“長い年月”は、ざっと20年です。
 私も大学しか知らないヤカラなので、偉そうな事は言えませんが、世間とのギャップを深く考えた次第です。
 最先端をいくはずの大学が、世間から一番遅れた事を当たり前のようにしている、その事を私は素人の家内から学んだのです。

「一番必要としている人々に、一番遠い存在である芦生」
 この問題も解決するのに、また、その位のスパンを要するのでしょうか？
 大学も、法人化になりました。

打って出るのも大切なことでしょう。
 しかし、こうした自分達の足元をしっかりと固めていかなければ、やはり確固とした大学にはなれないのではないかと考えています…。

芦生研究林で言えば、少なくとも、ハンディをお持ちの方々から、利用したいのですが、というお尋ねがあった際には、最小限だけでも対応できるだけの“インフラ整備”だけはしておく社会的義務がある、といった段階に入ったのではなからうかと、考えています。

いや、考えだけではなく、実際に整備する時期に入っているのだと。

…元気な子供と職員のやり取りの声を聞く度、そんなことを考える私です。（文：芝 正己）



体験学習はじまり～！



楽しいお弁当タイム



気になる木？



”トトロの穴” - ちょっと拝見？



著者プロフィール

芝 正己（しば まさみ）
 京都大学フィールド科学教育研究センター（森林環境情報学研究分野 准教授）所属。
 京都大学および宮崎大学・三重大学を経て1997年10月より現在に至る。
 専門は、森林利用学、森林管理・情報学。
 これまでの主な研究テーマは、
 ① 森林の経営基盤整備計画・評価法に関する研究、
 ② 持続可能な森林管理と森林認証制度に関する研究、
 ③ 森林の資源利用と保全計画に関する研究。